

## 【学位論文審査の要旨】

### I 本論文の課題

本研究は貧困など社会・経済的に低い位置に置かれる若者の中で、就労その他の社会的な活動に参加していない、あるいはできないでいる者たち（著者のいう「低層孤立者」）の存在を明らかにするとともに、その支援実践の方法を探求しようとするものである。

若年層の中に、社会的活動に参加せず、相対的に孤立した状況を過ごしている者たちがおり、その中には社会参加に一定の困難を抱え、支援が必要とされる者たちが存在することは、「ニート」や「ひきこもり」問題などとして、この間、その認知が進んできた。またそうした認知の進行とともに、そのような状態から抜け出すための各種機関による支援実践やそれを支える一定の施策なども広がってきた。

しかしそうした支援機関などで捕捉される者たちのほとんどは高学歴の親を持つなど社会・経済的に中層以上の家庭で育つ者たちであり、低階層の者たちの中にも同様の問題が存在するか否かについてはほとんど認知がされてこなかった。それは一つには、こうした若者支援のほとんどが、当人または親などから発せられる支援要請に基づいて対応するもの（著者のいう「要求応答型」）であり、そのような支援要求を行わない、あるいは行えない者たちは捕捉できない構造となっていたためである。

このような状況は、支援実践のみならず、教育学・社会学等の領域における社会的に孤立する若者を対象としたこの間の研究状況にも反映しており、先行研究のほとんどももっぱら、支援機関などで捕捉できたり、自らがその経験を記述・発信できる者たちの経験に基づくものであった。

これに対して本研究は、生活保護事業をベースに、支援を必要としていると思われる低階層の若者たちに、支援機関側から接近を図る、「支援機関アプローチ型」の支援実践を対象とし、これまで多くの支援機関が対象とできなかった、またほとんどの先行研究が対象としてこなかった層の、社会的に孤立した若者の状況と課題、必要な支援のあり方を明らかにしようとするものである。その際、自ら支援要請を発しない者たちに接近し、その状況や課題を把握するには、要求応答型機関がカバーする者たちの把握とは異質の、実践的研究方法が必要とされる。本研究が実践的研究方法をとっているのは、そのためでもある。したがって本研究は、これまでの研究が捕捉できていなかった重要な対象群に光を当てようとする点でユニークであるとともに、研究方法的にも非常に挑戦的なものである。

### II 本論文の構成

#### 序章

- 1 節 フィールドでの問題関心
- 2 節 本研究の課題
- 3 節 用語の確認

#### 第 I 部 「不活発な若者」への注目と不可視化

- 1 章 社会活動から遠ざかる若者への注目
  - 1 節 「フリーター」から「ニート」へ
    - 1－1. 移行の不安定化と「フリーター」
    - 1－2. 「ニート」の登場と欠陥
  - 2 節 「ひきこもり」として焦点化された人々
    - 2－1. 不登校「その後」として
    - 2－2. 「犯罪リスク」から「ニート」論へ
  - 3 節 若者政策の拡大とその対象
    - 3－1. 2000 年代前半：フリーター・失業層
    - 3－2. 2000 年代後半：「ニート」「ひきこもり」へ
    - 3－3. 2000 年代末以降：社会的排除層への注目
  - 4 節 注目されたのは誰か
- 2 章 貧困・生活不安定世帯で「不活発」な状態にある若者たち
  - 1 節 貧困・生活不安定世帯をめぐる諸研究からの知見
    - 1－1. 学校への「不適応」
    - 1－2. 離学後の無業
    - 1－3. 諸研究からの知見
  - 2 節 「支援機関アプローチ型」事業で見出された若者たち
    - 2－1. 「支援機関アプローチ型」支援
    - 2－2. 生活保護世帯で無業状態にある若者たち
  - 3 節 貧困・生活不安定世帯の「不活発」な若者とは
- 3 章 本研究の対象一見過ごされてきた若者たち
  - 1 節 「不活発な若者」とは誰か
  - 2 節 二重に不可視化された若者たち
  - 3 節 なぜ「低層孤立者」に注目するのか

## 第Ⅱ部 「低層孤立者」の経験と〈支援〉

- 4 章 無業・孤立状態をめぐる解釈と課題
  - 1 節 「ひきこもり」はどのように語られてきたのか
    - 1－1. 「ひきこもり」をめぐる解釈の変遷
    - 1－2. 「ひきこもり」の強い葛藤
    - 1－3. 葛藤に水路づけられた〈支援〉
  - 2 節 「低層孤立者」の経験を論じる際の課題
    - 2－1. 「葛藤モデル」の問いなおし
    - 2－2. 実践的課題の検討
  - 3 節 第Ⅱ部の課題と構成
- 5 章 研究対象と分析視点

- 1 節 本研究の対象
  - 1－1．対象事業の概要
  - 1－2．対象とする若者
- 2 節 分析視点
  - 2－1．Narrative Inquiry とは何か
  - 2－2．Narrative Inquiry におけるストーリー概念
  - 2－3．Narrative Inquiry への注目理由と留意事項
- 6 章 不可視化された若者に接近する
  - 1 節 c さんの無業をめぐる経験
    - 1－1．c さんとのかかわり
    - 1－2．ストーリー分析からみる c さんの経験
    - 1－3．「低層孤立者」にとって無業とはどのような経験か
  - 2 節 かかわりの実践論
    - 2－1．かかわりをつくりだす実践
    - 2－2．かかわりをもてない若者たち
  - 3 節 なぜかかわることが必要なのか
    - 3－1．かかわることは可視化すること
    - 3－2．選択可能性を保障する〈支援〉
- 7 章 「低層孤立者」への実践からみる「回復」と〈支援〉
  - 1 節 a さんの無業をめぐる経験
    - 1－1．a さんとのかかわり
    - 1－2．ストーリー分析からみる a さんの経験
  - 2 節 ストーリーの形成・変容にかかわる実践
    - 2－1．〈場〉の転換をめぐる実践
    - 2－2．ストーリー形成を支える実践
    - 2－3．ストーリー同士の相互作用
  - 3 節 再ストーリー化からみる「回復」と〈支援〉
    - 3－1．「低層孤立者」の「回復」
    - 3－2．〈支援〉は何をするのか
- 終章
  - 1 節 「低層孤立者」の存在の可視化へ
    - 1－1．「低層孤立者」の“発見”
    - 1－2．不可視に至る構造と課題
    - 1－3．「低層孤立者」とその周縁
  - 2 節 「低層孤立者」の無業・孤立をめぐる経験
    - 2－1．「葛藤」になるとは限らない無業

2-2. 再ストーリー化プロセスとして「回復」をとらえなおす

### 3節 「低層孤立者」への実践と〈若者支援〉の課題

3-1. ニーズを表出しない人々への〈支援〉の必要性

3-2. 「低層孤立者」への〈支援〉実践

3-3. 経験と実践を「ストーリー」からとらえる

### 4節 今後の課題と展望

## 引用文献

## III 本論文の概要

### 序章

2000年代以降、「ひきこもり」「ニート」など、社会的活動に十分に参加しない／できない若者の存在が社会問題化し、本人または家族の求めに応じて〈支援〉を開始する「要求応答型」の支援機関が広がってきた。他方、原は、生活保護世帯で無業状態にある若者への支援事業に参画したが、それは、支援機関側から〈支援〉が必要だと思われる若者にかかわっていく「支援機関アプローチ型」事業であった。そこで出会う若者は、「要求応答型」を対象とした研究で注目された人々とは異なる様相を呈しており、実践上戸惑うことになった。従来、無業・孤立状態にある若者として可視化された人々とは異なる存在と実践があるという問題意識を持つことになる。そこで、〈若者支援〉において見過ごされてきた人々の存在、経験、そしてかれらにかかわる実践の要点を明らかにするという三点を課題として設定した。

### 第I部 「不活発な若者」への注目と不可視化

第I部では、社会的な活動に参加せず非活動的な状態にある若者のうち、誰が「不活発な若者」として注目され、その背後で誰が／なぜ不可視化されてきたのか明らかにすることを試みた。

#### 1章 社会活動から遠ざかる若者への注目

まず、十分な社会参加をおこなわない若者として社会的関心を集めてきた人々の属性や特徴を明らかにした。1節では「ニート」をめぐる言説の検討をおこなった。日本型「ニート」は、イギリスのNEET概念から変質し、若者の意欲の問題や中流家庭の「ひきこもり」と重ねられるなかで、低階層の若者の存在を等閑視してきた。また、低階層へ言及される場合も、「犯罪親和層」という想定以上のことはほとんど語られず、ブラックボックス化してきたことを明らかにした。2節では、「ひきこもり」に関する言説を検討し、1990年代に問題化した「ひきこもり」は、実践・研究共に一貫して中流家庭に育った若者たちを主な対象とてきたことを明らかにした。さらに、3節では2000年代から開始された若者政策の対象となってきた人々の変遷を追うと、家族や自らの規範的プレッシャーによって突き動かされる（主に中流家庭の）人々が政策の利用者となっていることが明らかになった。4節では以上をまとめ、1990年代から生じた、社会的な活動に十分に参加しない若者への注

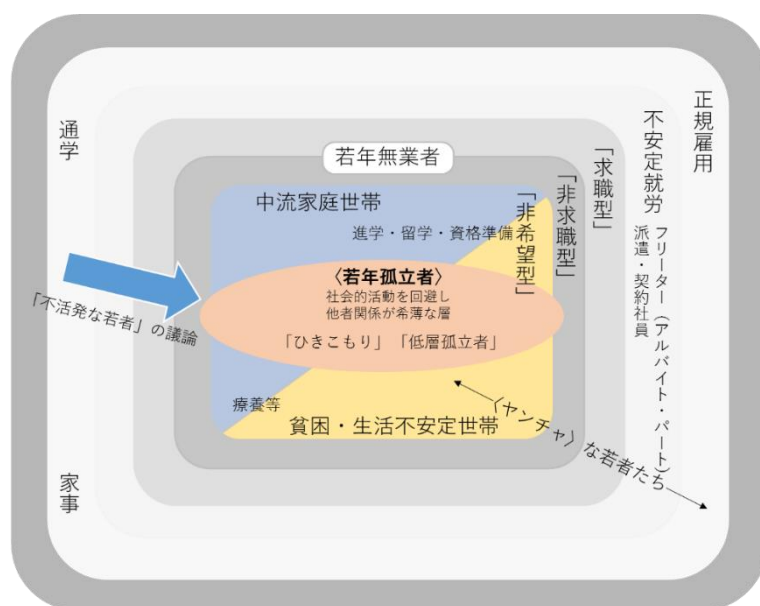
目や〈支援〉が、経済的に豊かな者たちの無業や孤立に焦点化し傾倒してきたことを明らかにした。

## 2章 貧困・生活不安定世帯で「不活発」な状態にある若者たち

2章では、若者の貧困研究や、近年展開される「支援機関アプローチ型」の取り組みに注目し、低階層で非活動的な状態にある人々の存在や特徴に迫ることを試みた。まず、貧困・生活不安定世帯の研究を対象に、学校経験と離学後の状況に注目して検討した。古くから一貫して貧困・生活不安定世帯の長期欠席者や無業者が存在しているにもかかわらずその実態はほとんど明らかにされていない。また、数少ない実態記述において言及されるのは反学校・非行的要素をもつ〈ヤンチャな子ら〉といわれる者たちであり、孤立状態にある低階層の若者はほとんど注目されていない。次に、著者が参画した「支援機関アプローチ型」事業の対象者の類型化をおこない、低階層で無業状態にある若者の全体像をとらえることを試みた。長期欠席もしくは半年以上の無業を経験している80名のなかには、他者関係が希薄化し孤立している者と、その一方で非行要素のある仲間関係を保持する者の両者が含まれていた。以上から、貧困・生活不安定世帯の若者のなかには、同じく無業状態にあっても、非活動的で孤立しがちな若者たちと、〈ヤンチャな子ら〉と形容されるような活発な若者たちの双方が存在していることを見出した。

## 3章 本研究の対象一見過ごされてきた若者たち

社会活動を回避する若者のなかで誰が／なぜ見過ごされてきたのか考察した。1節では、社会的な活動を回避するなかで他者関係が乏しくなり、非活動的な状態にある若者たち（若年孤立者）のなかには、従来注目を集めてきた中流家庭に多いとされる「ひきこもり」と、その背後でほとんど見過ごされてきた貧困・生活不安定世帯で無業・孤立状態にある「低層孤立者」が位置づくことを示した（図表3-1）。続いて2節では、「低層孤立者」の存在はなぜ不可視化されてきたのかについて論じた。企業主義的統合を特徴とし、公的福祉制度を欠いてきた日本社会では、学校や企業から離脱した者はもっぱら家族によって支えられることになり、そもそも可視化されづらい。また、「積極的行動」を起こし「声をあげる」中流家庭の人々の無業・孤立が問題化され、貧困研究においても逸脱的・反社会的なものが問題化されやすい〈ヤンチャ〉な若者たちに目が向くなかで、「低層孤立者」は二重に不可視化されてきたことを明らかにした。さらに3節では、〈若者支援〉の必要性を原理的に確認したうえで、「低層孤立者」のような自ら〈支援〉ニーズを表明しない若者にも〈支援〉は必要で



図表 3-1 無業・孤立状態にある若者の付置

あり、〈若者支援〉の対象として位置づけていくことが必要であることを主張した。

## 第Ⅱ部 「低層孤立者」の経験と〈支援〉

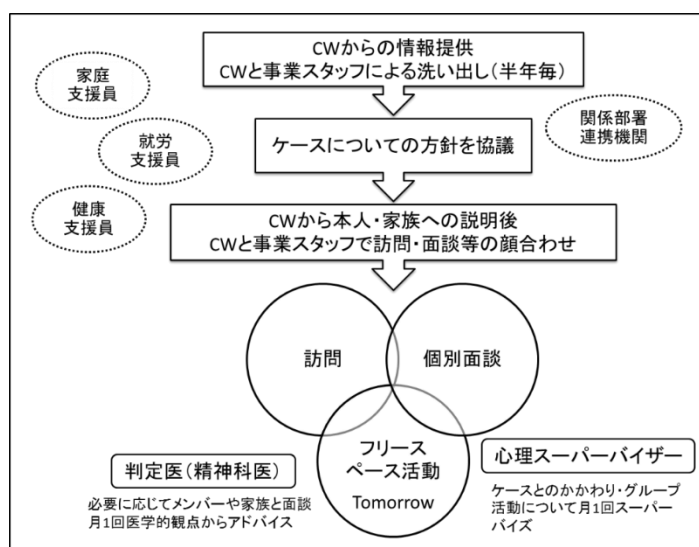
第Ⅱ部では、第Ⅰ部でその存在を明らかにした「低層孤立者」に焦点化し、かれらの無業をめぐる経験と〈支援〉について論じた。

### 4章 無業・孤立状態をめぐる解釈と課題

従来注目されてきた中流家庭の「ひきこもり」における知見を確認し、似た状態にある「低層孤立者」の経験や〈支援〉を論じる際の着眼点を整理している。1節では、「ひきこもり」やその「回復」、あるいは〈支援〉がどのように語られてきたのか検討した。「ひきこもり」は、心理的葛藤から状態像へと注目を移し、さらに就労問題や精神医療問題としての位置づけを強めるなどの変遷をたどっているが、他方でかれらの葛藤する心理状態は一貫して示され続け、〈支援〉も葛藤の緩和をキイに展開・議論されてきた。次に2節では、似た状態にある「低層孤立者」の経験や〈支援〉を論じる際の課題や視点の整理をおこなった。無業や孤立をめぐる本人が「葛藤」しているという前提を問いなおすこと、またそもそも不可視化されてきた人々の経験に迫るには、どのようにかれらにアクセスしかかわるのかという実践的課題を論じる必要があることを提示した。以上から、3節では、第Ⅱ部の研究課題を、①「低層孤立者」にとっての無業という経験をいかに解釈するか、②「低層孤立者」にかかわる実践とはどういうものであるかの二点とし、「低層孤立者」の無業状態が、①どのような経験として、②どのような実践によってみえてくるのか論じることとした。

### 5章 研究対象と分析視点

5章では、本研究の研究対象および分析視点について述べた。1節では対象事業の概要を詳述した。本研究で対象としたのは、首都圏内のB市福祉事務所でおこなわれている生活保護世帯で「ニート」「ひきこもり」など「特に何もしていない」状態にある10代後半から20代の若者への「支援機関アプローチ型」事業である。事業の対象者は定期的なケース会議や担当ケースワーカー（以下、CW）からの情報提供によって選定され、〈支援〉は、訪問、個別面談、フリースペース活動の三つを柱としている（図表5-1）。本研究では、著者がNPO職員として当該事業のスタッフを担った2010年4月～2015年3月にフリースペース活動に参加していた若者のうち、比較的利用が長い4名を対象とした。次に2節では、本研究の分析視点である



図表 5-1 対象事業の流れ

Narrative Inquiry（ナラティブ的探究、以下 NI）について示した。NI は、ナラティブという現象および方法の両者に注目する実践研究方法である。Dewey の経験概念を下敷きに人はストーリーを語り生きる存在だととらえ、対象者と「共に生きる」なかで、非言語的なふるまいなどもその人の生きるストーリーを体現するものとみなし探究をおこなっていく。中流家庭「ひきこもり」の若者たちと比して自己語りがおこなわれることの（少）ない「低層孤立者」の経験に迫ろうとする際に有用であることから採用した。

## 6章 不可視化された若者に接近する

対象者として名前が挙がって以降も数年は断片的なかかわりしかもつことのできなかった男性の事例を取り上げ、これまで不可視であった「低層孤立者」とどのようにかかわりはじめ、またそのかかわりのなかで、どのように当人の経験に接近することができるのかを検討をおこなった。1節では、課題①無業経験の分析をおこない、「低層孤立者」のなかには、家族のストーリーなど自らの生きようとするストーリーにそくすなかで、葛藤を伴わずに無業状態を経験している者たちが存在する可能性を指摘した。また、2節では、課題②にかかわって比較的初期の実践局面に関する考察をおこなった。給付制度をベースとした〈支援〉では、気乗りしない若者とかかわっていく過程が生じるが、事例からは、スタッフが試行錯誤しながらかわるあり方が若者の生きるストーリーに接触したときに、以前よりも継続的なかかわりが可能となることがうかがえた。以上から、〈かかわりの定着〉に至る前段の実践においては、若者の生きるストーリーの探究が極めて重要な視点となることを明らかにした。3節では、以上を踏まえ、なぜ〈支援〉を求めている（ようにみえる）「低層孤立者」にかかわっていくことが必要なのか、実践論的観点から考察した。かわることは可視化することである。また、かかわりによって新たなストーリーを形成していく可能性もあり、そうした可変性を等閑視することなく、〈支援〉を拒否する権利と共に〈支援〉を受け幸福追求をおこなっていく権利があるという視点から、〈支援〉の選択可能性を保障していくことの重要性を強調した。

## 7章 「低層孤立者」への実践からみる「回復」と〈支援〉

かかわりが定着してからの若者のストーリーの変遷に注目し、ストーリーの形成や変化に実践がどのようにかかわっているのか、長期利用者の事例から検討をおこなった。1節では、課題①無業経験とは、どういう経験であるのかについて分析した。事例からは、人とかかわるか否かをめぐる二つのストーリーの間を揺れ動き、自らの「支えとするストーリー」を「再ストーリー化 restoring」していく過程がうかがえた。また、複数の〈場〉の異なる関係性の人々とストーリーを共有しながら、新たなストーリーを強め安定的なものとしていく過程が見出された。続いて2節では、課題②として、上記のようなストーリーの形成や移り変わりに、実践がどのようにかかわっているのか考察をおこなった。事例からは、〈場〉の転換が新たなストーリーの形成に関係している様子がうかがえたが、気乗りしない若者に対してはどこまでその転換を迫るのかという実践的課題が生じる。本研究では、拒否という行為に自己決定や主体性が内包されている可能性を指摘し、先行する実践

のあり方の批判的検討をおこなった。また、新たな〈場〉での体験は、新しいストーリーを形成する構成要素となるが、それはストーリー化を促す実践によって後押しされていることも明らかにした。形成された若者のストーリーは、〈支援〉の場外の他者にも発信し共有される「半外地」化の実践によって、強化・安定化していた。また、スタッフのもつ若者についての成長のストーリーは、若者を励ます一方でときに重圧ともなりうる両義性をもつことも明らかとなった。以上を踏まえ、3節では、「回復」をめぐる考察をおこなった。本研究の事例からは、再ストーリー化をおこなっていく過程を「回復」とみなせたが、そのためには新たな体験を得られる〈場〉や、自らのストーリーを共有する多様な関係性の他者を若者の周囲に広げていく〈支援〉が求められることを明らかにした。

## 終章

終章では、本論のまとめをおこない、総合的な考察をおこなった。1節では、これまでの若者の無業や孤立をめぐる研究・実践・政策、そして貧困研究までもがまったく見落としてきた者たちの存在を「低層孤立者」として初めて明確に同定したことの意義について確認した。2節では、「低層孤立者」の無業や孤立の経験を総括し、従来の研究・実践における「葛藤モデル」が、「低層孤立者」のみならず中流家庭「ひきこもり」にあっても、当人の経験を不可視化する作用を及ぼす可能性のあることを指摘した。また、本研究では「回復」を再ストーリー化のプロセスとしてとらえなおしたが、それは、従来重視されてきた就労といった状態像を目標ではなくストーリー形成を支える〈場〉のひとつとして重視することで、そのような〈場〉があるのかという社会・環境問題に内面問題を接合させていく視点をもつものである点で新規性を有している。次に3節では、実践的観点の総括をおこなった。とりわけ、本研究で依拠してきたストーリーの視点は、若者自身の能動性や主体性に眼を向けさせ、印象論的見方を排す点から、〈若者支援〉実践において有用であることが浮かび上がった。また、若者だけでなくスタッフもまたストーリーを生きる存在であることから、若者だけが一方的に対象とされ論じられる非対称的なあり方に、一石を投じる可能性を含んでいることも指摘した。最後に4節では、本研究に残された課題を論じ、とりわけ、スタッフの生きるストーリーの詳細な検討は焦眉の課題であることを示した。

## IV 審査結果

冒頭にも言及したとおり、本研究はこれまで死角となっていた低階層家庭の若者の中で社会的孤立層の存在、及びそれらの者たちが抱える状況を明らかにし、実践の課題と方法を検討したものである。本研究の意義は以下の点にある。

第一に、社会的に不活発で孤立した若者たちが、中階層以上に限られるわけではなく、低階層の者たちの中にも一定数存在することを明らかにしたとともに、それらの者たちがこれまでなぜ社会的に不可視化されていたのかを、不登校、ニート、ひきこもりなどをめぐる言説分析やわが国の社会保障制度の限界などの検討を通して解明したことである。

第二に、そうした者たちの置かれている状況と世界を、支援機関側から彼らに接近する



実践を通して描いたことである。ここではとくに、自ら支援要請を発して支援機関に接近してくる者たちとは異なり、接触を試み、一定の関係を構築しようとする支援機関側からの実践的アプローチ抜きには、彼らの状況自体が理解できないこと、及びそうして把握できた彼らの状況のなかには、従来の要求対応型支援において共有されていた、「孤立層は必ず、社会参加できていないことへの顕在的潜在的葛藤を抱えている」という定説とは異なるタイプの者たちが存在することが示されたことは、重要な成果といえる。

これら二点については、公開審査の場においても、社会福祉学研究者からも、従来、社会福祉領域でも貧困層の若者の研究は死角となっており、就労支援かさもなければ障がい・病気として措置されてきた、また支援者側からの視点ではなく、当事者の生きる世界に即して問題を把握している点で高く評価できるとの発言があった。

一方、残された課題もある。第一に、支援実践分析の方法論としての Narrative Inquiry をめぐる問題である。例えば本研究においては、「再ストーリー化」という概念が、同理論のオリジナルな提唱者らとは若干異なる意味で使われているのではないかとの指摘があった。この点は、同理論の著者による修正や発展の可能性を含め、さらなる検討が求められる。

第二に、支援実践の分析・評価にあたっての、実践者自身が持つ価値観や「ストーリー」をめぐる問題である。本研究では実践者自身のストーリーが十分分析されていないが、教育実践を対象とした研究においては、実践の過程での実践者自身の自分の価値観やストーリーの自覚化と変容が、若者のストーリーの理解・変容とともに重要ではないかとの指摘があった。本研究においては残された資料の限界から、この点は不十分なままに終わっている。今後克服されるべき課題である。

2月23日に行われた公開審査の場で原は、本論文の成果と到達点についての的確に答えるとともに、その限界についても明らかにし、指摘された課題を真摯に受けとめた。残された課題はあるものの、本研究の意義は高く、今後のさらなる発展を期待し、審査員一同、一致して原未来に博士（教育学）を授与することが適当と判断した。